



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

3. 日本語・日本事情(1999年度)

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中須賀, 徳行, 牟田, おりゑ メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12099/3361 |

3. 日本語・日本事情

留学生センター 中須賀徳行・牟田おりゑ

1. 岐阜大学全学共通教育における日本語・日本事情教育の概要

留学生センターが1996年5月に省令施設として発足したのに伴い、それまで教養部で日本語・日本事情教育を担当してきた2名の教官（中須賀，三浦）が，留学生センターの日本語・日本事情教育担当として移籍した。しかし三浦は1998年春に他大学に転出し，1999年度から牟田がその後任として引き継いだ。

日本語演習科目および日本事情科目は，基本的には外国人学部留学生を対象に開講されているが，学術交流協定校から来ている留学生（特別聴講学生）にも日本語のレベルが合う場合には門戸を開き，単位互換ができるように配慮している。また科目等履修生として受講した学生も僅かながらいた。「日本語・日本事情」科目を受講した留学生は，延べ人数では前期56名，後期48名に上った。

履修した日本語科目のうち，4単位（地域科学部は6単位）までは一つの外国語に限って充当でき，また日本事情科目についても6単位まではジャンル別科目の人文科学系あるいは社会科学系科目の単位に充当できることになっている。なお日本語演習科目の1コマ（90分）は1単位に相当し，日本事情科目の1コマ（90分）は2単位に相当する。

私費であれ政府派遣であれ，学部留学生はいずれも日本語能力試験（1級）を受験した者ばかりであるから，その日本語能力は1級あるいはそれに準じるものではあるが，やはり日本人に混じって日本語で教育を受けるとなると困難はつきまとう。したがって日本語の授業計画を作成するにあたっては，日本語による専門の授業が理解でき，また日本語の基礎文献等が読めるようにということを目指した。日本事情の場合には，日本の文化や歴史を学ぶことを通して異文化理解を進め，日本での勉学や生活がスムーズにいくようにということに力点を置いた。いずれにしても留学生の日本語能力には相当の差があり，特に漢字の読み書きでは学力差が著しいためその克服に苦慮した。

以上2名の教官が日本語演習科目をそれぞれ半期2コマずつ，日本事情科目を半期1コマずつ，1年間にわたって担当した。以下の授業科目でAは中須賀が，Bは牟田が担当したことを示している。なお各授業科目のシラバスについては「全学共通教育シラバス 一授業案内一 1999年，岐阜大学」に掲載してあるのでそちらを参照されたい。

1.1. 日本語演習科目

1.1.1. 前期

日本語A I（読解）

日本語の講義が理解でき，また基礎的な専門書が読めるように，標準的な教科書（光村図書『中学国語2』他）を題材にして，読解，漢字の読み書きや作文の訓練を行った。毎回授業の最初に漢字の小テストを実施した。その結果，漢字圏の学生は無論非漢字圏の学生に比べれば一般的にいい成績を取ったが，前者はどちらかというと書くことよりも読み方が不得手であり，一方後者は書く

ほうが苦手であった。テキストは全体としてレベル的に合っていたが、短歌や心理描写を含む散文は難しかったようである。

日本語AⅢ（聴解）

中級用の教材（『ニュースで学ぶ日本語』）を基にテープによる聴解練習を行った。教材では聴いた結果を平仮名で記すことになっているが、なるべく漢字を使って書くように指示した。非漢字圏の学生にとってはやはり漢字が難所であったが、中国人学生にとってはカタカナで書かれる外来語が苦手であった。比較的単調に見える訓練ではあるが、学生にとって気を休めることのできない学習なので、効果は着実に上がり聴解能力と書く力が伸びていった。

日本語BⅠ（読解，口頭発表）

池田重監修『中級からの日本語 読解中心』（新典社，1990）の前半を中心に，（1）読解練習－教科書学習の後，各課の内容に沿った副教材（新聞記事，本の抜粋等）を使って読解能力の補強を目指すことと，（2）セミナー発表によって，口頭発表能力の開発をねらった。

反省点としては，学習量と評価対象の種類・内容が多すぎたことである。その背後には，履修学生の日本語能力の差がかなりあること，また，学生の学習動機づけにも差があり，要求された学習を全てこなす学生と全くしない学生との格差が大きいことがあった。

日本語BⅢ（語彙，聴解）

産能短期大学日本語教育研究室編『講義を聞く技術』（産能大学出版部，1990）の教科書とテープを中心に，補助教材として語彙・内容に関するものを使用した。テープは大学レベルの講義内容・形式であるため，まず未習語彙の確認をし，講義内容の背景に関する補助教材を読んで，テープ聴解を行った。

テープの講義内容が産業機構，心理学，日本文化，社会などに関するもので，聴解練習としては高度すぎた感があった。また，履修学生の日本語能力，学習意欲にも格差のあるクラスであった。

1.1.2. 後期

日本語AⅡ（読解）

日本語AⅠに引き続き講義で，同じ教科書（光村図書『中学国語2』）や他の視聴覚教材を使って，日本語による講義を理解し，基礎的な専門書が読めるように，読解の演習を行った。引き続き毎回，授業の最初に漢字の小テストを実施した。ときどき小説などに出てくる言い回しを使って，作文の訓練を行った。

日本語AⅣ（聴解）

前期に引き続き『ニュースで学ぶ日本語』を使ってテープによる聴解練習を行うとともに，もう少し上級の能力を要求される，憲法に関する講義を聞かせて同様の訓練を行った。この場合はニュースと違って，専門用語の知識がないと理解できないという問題が生じた。最後の方では平野啓子の語りをビデオで聞かせるという聴解練習をさせたが，やはり心理描写の入る散文的な文章は難しかったようである。

日本語BⅡ（読解，口頭発表）

池田重監修『中級からの日本語 読解中心』（新典社，1990）の後半を中心に，教科書学習の後，各課の内容についてディスカッションし，それをまとめる形で要約を宿題として課した。前期同様，セミナー発表を課した。

前期の反省と問題点を踏まえ，学習量を大幅に減らしたが，それは同時に教科書の内容が前期に比べて高度になっていることも反映している。各課の内容が深まったことと，文化的テーマが増えたことで，内容をめぐってのディスカッションは活発になった。各課の要約はなかなかむずかしかったようだが，要約の模範例を提示しながら，ディスカッションをまとめる作業としては効果があったように思う。

日本語BⅣ（レポート作成）

木下是雄『レポートの組み立て方』（筑摩書房，1994）を教科書とし，大学における研究レポート作成に関する知識，手順，技術などに関する「考え方」，「書き方」を中心に行った。この授業の過程で，大学図書館の有効な使い方を図書館員の御協力を得て行ったが，コンピューターに弱い学生にとって，コンピューターによる検索実習などは好評であった。日本語のチェックとして，教科書の各項目を学生がまとめて発表し，その日本語をクリニックの形で講評する形式で行った。

評価は教科書の手順に従って書いた主題文，レポートを対象にした。中には研究レポート作成の必要要項を有効に学習して，多様な文献を駆使しながら研究レポートとして文句ないものを提出した学生もいた。他方，感想文や研究書の要約にとどまった学生も多く，日本語能力以前の問題をいかに認識させ，克服するかが課題として残った。

1.2. 日本事情科目

日本事情については，これまで日本史を二人の教官が分担して通年で全体を教えるという方針をとってきたが，牟田の専門を生かすという意味合いと異文化理解を進めるということから，今年度から中須賀が日本史，牟田が文学作品を題材に異文化理解教育を行うこととした。

1.2.1. 前期

日本事情AⅠ

日本列島における原始社会，古代国家をへて鎌倉時代，室町時代までを学習した。これまでの日本史の教科書は外国人留学生を対象に書かれたものであったが，もっと詳しい史実を教えた方がよいと考え，高校教科書『明解日本史A』（改訂版，三省堂）をテキストに選んだ。しかし日本史独特の特殊な用語や人名，地名が読めず，漢字圏の学生でもかなり難しい場面があったようである。その点を緩和するために，ビデオ（たとえばNHK「歴史でみる日本」）などの視聴覚教材も毎時間用い，解説を加えた。

日本事情BⅠ

日本社会と日本人の生活に表れる文化に触れることを目的として，有吉佐和子著『恍惚の人』をテキストとして選んだ。1週間に1章読ませ，各章のテーマについて講義を行った。非漢字圏の学生のために，テキストの朗読を録音し，時には漢字リストを与え，学生には当番制で各章の内容に

関する質問事項に答ながら、ストーリーの要約をさせた。

講義のテーマは、日本人の宗教観、火葬の歴史、女性問題、老人問題、文学に表れた老いのテーマ、日常生活に表れた文化（『奥の細道』、昔話等）など多岐にわたったが、平均的家族の生活と問題を理解する意味で、留学生には日本社会、文化への入門的知識を与えられたと思う。

非漢字圏の学生も毎週のノルマをこなし、日本語読解力も格段に伸びたことが成果の一つである。盛り沢山の内容、評価（各章に関する質問、小説の内容に関する発表、レポート、試験）であったが、全員が欠席もなく、全課程をこなしたのは、小説を軸にした日本社会理解であったため興味を持ったことが大きな理由かと思われた。

1.2.2. 後期

日本事情AⅡ

日本事情AⅠに引き続く講義で、同じ教科書『明解日本史A』を用いて授業を進めた。具体的には大航海時代を経て近世江戸時代、ついで日本の近代化から明治、大正時代までを概観した。時間の都合上、現代について学習することができなかったのは残念である。日本史独特の用語や人名、地名が読めないことから来る困難を克服するために、ビデオなどの視聴覚教材や英語による解説資料なども与えて解説した。

日本事情BⅡ

ヴィジュアルな教材を中心に、日本文化理解をねらうコースとしたが、選択した教材『舶来の日本料理：食文化の翻訳術』と一地方の祭をめぐるドキュメンタリーを見てディスカッションする過程で、文化の歴史や継承に関する教材に否定的な反応を示す学生がいたため、後半は「桜」というテーマに変更して、日本人（古今集の時代から現代までの詩人、小説家）がこのテーマをいかに捉えてきたかを探ることに焦点を当てた。

前半に過激な反応を示した学生は、後半の教材から、「桜」というテーマが日本人にとって一元的なものではないことを知って納得したようであったが、「文化」を扱う場合、留学生の持つ文化概念を整理した上で臨む必要があることを痛感した。履修学生の中には多文化社会出身の留学生もいて、ディスカッションの中でマイノリティーの文化・伝統の継承の重要性を述べる場面もあり、ビデオにあった日本の一地方の文化・伝統の継承に関連付けて、一国における文化の多元的側面を再認識することはできたように思う。